

伝統に生きる

—あらかわの工芸技術—



にんぎょうきじ
人形生地

わたなべ さだ子
渡辺 さだ子

(平成6年度作品)
16mm映画・ビデオ
カラー・19分

プロフィール

住所、荒川区東日暮里5-34-3

大正14年(1925)、東京都生まれ。

平成5年度荒川区指定無形文化財保持者に認定される。

10歳の時、父親に師事。以来、分業制がとられる人形づくりのなかで、最初の工程にあたる、人形の頭部、手足、その他の原形(生地)づくりを担当している。

特に「雛人形」や「五月人形」の注文の季節には徹夜が続くほど、忙しいという。

次の工程の職人に、できるだけ早く「生地」をまわすことと、質の高いものを作ることで厳しい仕事ぶりの中に優しさを秘め、残り少なくなった職人技の伝統を守り続けている。

企画 東京都荒川区教育委員会・製作 毎日映画社

用具・工具

材料（マツヤニ、スギヤニ、硫黄、キラコ）

マルノミ、ヒラノミ、金槌、ドリル、トジボウ、ヘラ、ショウフ糊、桐のおが屑、鍋、七輪、など。

工程

- (1) 「釜型の調整」 （マツヤニ等で型を取る前に、マルノミや金槌、ドリルを用い、頭や冠、胴、手足など、上下の釜型を整える作業）
- (2) 七輪の火に鍋をかけ、中にマツヤニや硫黄等を加えて煮込む。
- (3) 「型取り」 釜型にタイミングよく鍋の原料を流し込む。型を火に焙りながら、冠、頭などの型をつくり上げる。このとき、粘つかないようにキラコを敷く。
- (4) 大釜で糊（小麦粉で出来たショウフ糊）をつくる。
- (5) 「桐塑生地」 桐のおが屑をショウフ糊とよく混ぜ合わせてつくる。
- (6) 型や手のひらに軽油をつける（型から生地を抜く時、離れやすくなる）
- (7) 型に生地を詰めていく（頭、冠、胴、手足など）
- (8) 生地づくりが終わると乾燥。
- (9) 生地のバリを取る（「人形生地」の工程は終わる。）
- (10) 荒川区登録無形文化財保持者の人形頭師・高久秀芳さんに人形生地は引き継がれ、顔が描かれ、髪が結われる。
- (11) 最後に、荒川区登録無形文化財保持者の人形師・竹中重男さんの手に渡り、衣裳を着せられ人形が完成する。



「マツヤニの型で抜いた桐塑生地」

利用される方は ☎ 3891-4349

この記録〈16ミリ映画〉、〈ビデオテープ〉は、荒川区立荒川図書館で貸し出しています。貸し出し期間は、1回5日間です。お気軽にご利用ください。

※16ミリ映画は、団体登録と16ミリ映写機講習修了者が操作することが必要です。